愛媛教職員組合（JTUえひめ）

2016年11月30日発行
（愛媛教研版）

第53回愛媛・父母と教職員の教育研究会

2016年10月22日（土）

オープニングセレモニー

① 弾き語り:ガチャピンの相棒

演奏の様子

★ 君と雨と私の気持ち 御影:詞 ・ ガチャピン:曲 ★

♫ 私は雨が好き。
どんなに遅い時間でも 君が家まで送ってくれるから。
でも、君との時間が暖かくて
「また明日」って君の背中を見送るのが ひどくつらいから、
ちょっとだけ雨が嫌い。雨が嫌い・・・♫

参加者感想

- 君と雨と私の気持ちは、やわらからな印象で素敵です。
- ギターのうまいこと、びっくりした。

② ビデオ上映「アニメ戦争のつくりかた」 参加者感想

- 子どもにも見てもらえそうで、自分でも扱いたいなと思いました。
- 簡潔で分かりやすく、だけど衝撃的なインパクトがありとてもよかったと思う。

開会あいさつ 越智 勇二さん:愛媛に民主教育をすすめる会 会長

あいさつの様子

今年の5月27日にオバマ米大統領が、現職のまま広島を訪問しました。平和記念館に折り鶴を残し、世界に向けて『核なき社会』をと訴えました。謝罪がないことや核戦略に触れない不十分さはありますが、大きな転機になるのではないでしょうか。国会では憲法審査会を再開して憲法改悪へ進もうとしています。私たちは、戦前戦中の軍国主義教育によって、教え子を戦争へ駆り立てた反省に立って、戦後の教育は、『教え子を再び戦場に送るな』のスローガンのもと、平和教育を進めてきたと思います。戦後の民主主義教育はどうだったのか、点検し強固に作り変えないといけないのではないでしょうか。愛媛県は広島県の隣であり、被爆者も多数くらしています。しかし、被爆者からの体験談も十分聴けていないので、本日は、江種さんのお話を聴かせてもらって平和教育の内実を豊かにしていきましょう。

レポート発表 田中 正史さん:三島小学校

「子どもから学ぶ戦争と広島」

1 女川町の中の広島

東日本大震災の1ヶ月後、宮城県女川町に炊き出しに行きました。女川町に入った時、車内は「お

おーっ！」とどよめき。瓦礫の山、山、山。たくさんの木造住宅の土台の群れ。鉄筋コンクリートのビルが倒れている。巨大な津波の破壊力に圧倒されました。

原爆で焼け野原になった広島。同じです。1ヶ月後でこれだけの衝撃です。当事者の恐怖、悲しみや怒りはどれほどのものか。広島の被爆者の恐怖、悲しみ、怒りは？　私には、その大きさと深さを測りきれませんでした。でも、女川町で感じたことを持ち帰り、伝えなければと強く思いました。

レポート発表の様子

2　教員の私が子どもから学んだこと

(1)死んだ虫の命から戦争につなぐ

○　自主レポート（N0,234 の 592　4 年A・B「寿命」）

教室で遊んでいました。虫の死がいを見つけました。A「これって寿命で死んでしもたのかな？」B「虫に寿命があったよね。生き物全部だけど。」A「調べるか！」B「調べよ！寿命について。」さっそく調べました。カゲロウ 6 時間、ミツバチ 5 週間、シエラレオネ共和国の人 47 年。1947 年の日本人 52 年。今の日本人 83 年。B「おお！すごい。」A「こういうの見たら悲しくなるね。」B「うん。」これから一生けんめい生きようと思いました。

1947 年の「日本人の寿命 52 年」は、戦後の大変さを示しています。

(2)感想リレーで学年を超えて交流する

このレポートの感想をリレーして深めることにしました。

最初は 5 年生から開始です。「戦争」に反応した子どもが何人かいました。

C寿命の事を知って、生きたくても生きられない虫などがいると思ったから、悲しくなったと思います。私が「いいな」と思った事が一つあります。それは 1947 年から現代の寿命の変化です。1947 年は 52 年です。そのころは戦争があったけど今は 83 年です。戦争をしていません。これを見て命を大切にしようと思いました。（5 年生女子）

5 年生の次は 4 年生です。

Dぼくは、死ぬのは悪くなくて寿命が 6 時間だろうが 5 週間だろうが、精いっぱい生きれば、それでいいと思います。ゴキブリも悪いことをしに出てきてるんじゃないのに、殺すのは少し悲しいです。カも命がけで血をすっているんだと思いました。だから、ぼくはカをたたきません。死のことを書いたこのレポートは、すごくいいと思います。52 年しか日本人は生きられなかったけど、今は 83 年というのは、「思いやり」につながると思いました。だって戦争がなくなったのは「思いやり」だからです。（4 年生男子）　　※ 6 年生、3 年生と続きました。

3　親の私が子どもから学んだこと

(1)小学校の修学旅行で広島に行かなくなった

末娘は今年、6 年生になりました。5 年生の時から、修学旅行で広島に行くことを楽しみにしていました。ところが今年度は関西での体験学習に変更になりました。南海トラフ地震に備えた防災教育がねらいだそうです。

○ 三島小理科レポート（「修学旅行と広島」5 月 20 日から）

「どうして広島に行きたいの？」「戦争とか原子力爆弾の被害を知りたいから。」「どうして戦争のことが気になるの？」「また戦争をしたくないし、戦争になったら前の戦争で死んだ人に申

し訳ない。」「じゃあ広島に行こう。」GW に行きました。ボランティア・ガイドの説明を聞ききながら 4 時間歩きました。原子力爆弾を日本に落としたアメリカの大統領が広島を訪れました。原子力爆弾が落ちた日の広島市は、子どもがたくさん働いていました。戦争に行った大人の代わりです。たくさんの子どもの命が奪われました。

オバマ大統領と抱き合った森さんは、その時の子どもの数少ない生き残りです。地獄を見た森さんは、どんな気持ちでアメリカ大統領と言葉を交わして抱き合ったのでしょうか。原子力爆弾が落とされて 71 年。この時の被災者の問題は終わっていません。そして東京電力の原子力発電所の事故。こちらの問題もいつか解決するために、長いながい時間が必要です。このレポートは、「平和を考える」のテーマの校長訓話で紹介されました。

オバマ大統領と森さん

(2)世界に注目されている広島

久しぶりに訪ねた広島平和公園は外国人でいっぱいでした。「世界中の人が、なぜ広島のここに集まるのか？」を考えることから、平和を考えることもできます。

しかし広島を訪れたオバマ大統領の演説は抽象的で、変わらない部分も感じます。

4　子どもから学びとれる大人になろう

敵か味方かの二分法では、世界は混乱を増すと思います。憎しみと恐怖の負の連鎖を断ち切らなければならない。と知っていても、大人には国、文化、宗教、歴史等のしがらみがあって、歩み寄りを難しくしています。娘が小学 1 年生の時、習字の遊びの中で「平和は命」と書きました。

「パパ、見て！」おおーっ、その通りだね。どうして、これを書いたの？「わからない。」平和の問題の根っこは「命」だと思います。小さな子どもも感じるとることができます。すべての人に共通する価値です。「そんな単純なものではない」の意見もあるでしょう。確かにそうです。でも何度でも根っこの「命」に戻って、平和をとらえ直し続けることは大切です。広島についての娘との会話には続きがあります。

「戦争の反対は何？」「幸せ。」「じゃあ、平和の反対は？」「戦争もだけど、多くの人が反対することを進めること。」「今の日本は、そうなっていると思う？」「うん。」毎日の日常の中で、子ども（わが子・孫）が心のコップを上に向けた時、子どもの声に耳を傾けることが大切です。子どもに自分で考える力と習慣を身につけさせることは、学校だけの仕事ではありません。

参加者感想

- 女川町への炊き出しで見た衝撃や娘さんとの広島訪問に心を動かされました。加害、被害の問題について言えば、からめとられて生きている私たちの生き方があぶり出されているのではないか。自分たちの生き方ができない社会を自分たちの生き方ができる社会に変えていくことが大切なことではないか、ということを思わされました。
- 子どもたちから学ぶことも多い。実際に 11 月に子どもと広島に旅行に行く予定であり、原爆ドーム等にも立ち寄り、実際に今日の話と照らし合わせて見学して、子どもにも平和の大切さを伝えていきたい。
- 感想リレー、クラス全員で問題を考える授業など、子ども達にとって生涯心に残ることを経験（体験）させているので、すばらしいと感じました。

講　演

演題 「ヒロシマの心」

講師　江種　祐司さん　　・広島県原爆被爆教職員の会　会長

・広島平和教育研究所　研究員

講演の様子

アメリカのトルーマン大統領の命令によりＢ29の機長ティベッツが原爆を投下した。広島は放射線を焼き付けられた。核爆発によって放射線を焼き付けられた。原爆を人間の上に落とすのは地球上で初めてのことだった。皆さんもそのことは一緒に確認していただけると思う。この放射線は今なお広島の街に生き続けている。目に見えませんけれど皆さんがおいでくださるであろう平和公園、この平和公園は1949（Ｓ24）年から1952（Ｓ27）年までトラックで土を運んできては埋めた。そうしてできた公園だ。1m、2m下には、真っ黒な地面があって、その地面には放射線が生き続けている。どこでどのように生き続けているのかは目で見ることはできない。放射線は目で見ることはできない。その時広島の街にいて、今生き延びている人間の体の中にも生き続けている。だから私の体の中にも放射線が生き続けている。この話をすると肝心の話ができなくなる。私の中に焼き付けられた放射線は、何十年もたって私の目に襲いかかってきた。ある日、新聞の活字が拾えなくなった。眼科にすぐ行くと、「いよいよ始まりましたね。あなたの目は原爆白内障ですよ。」と宣告を受けた。入院して、右目を手術した。水溶液を流しながら手術をし、人工の水晶体を入れてもらった。厚手の包帯を巻いて数日後、「静かに目を開けるんですよ。」と言われた。おそるおそる目を開けるとよく見えた。色もよく見える。うれしかった。医術の進歩に感謝した。その翌年左目も手術をした。皆さんの顔がはっきり見える。私の水晶体は人工の水晶体だ。

もう一つわかりやすい話。白血球数が3500を超えない。皆さんの白血球数は6000から7000だと思う。私と同じ白血球数の方はいないと思う。娘が、高齢になる私を心配してついてきてくれている。いつ何が起こるか心配してついてくる。娘の白血球数は2500を超えない。原因はわからない。低いときは1500だ。放射線が遺伝子を通じて影響しているということだ。

私の息子は1997年まで小学校の先生をしていたが、血を吐いてホルモンを造る場所のがんに襲われて瞬く間にこの世を去って行った。私は、次々来るお医者さんに聞いた。「私は被爆者ですが、打つ手はありませんか。」と。「あなたが被爆者であることとあなたの息子さんのがんは関係ありません。」と言われた。どの医者も同じことを言う。しかし亡くなったとたん先生が来て、「実は不思議なことがたくさんある。死体解剖させてほしい。」といわれた。承諾したが、私にわかることはひと言も話してくれなかった。すなわちお医者さんにも、わからないということなんだと思う。科学者にもわからない。放射線被害がどのようになっていくのか。息子が生まれて産院から帰った時、何度も呼吸困難に陥った。日赤病院に連れて行ったら、胸腺が肥大して呼吸器を圧迫して呼吸困難を引き起こしていた。原因はなにかと聞いたら、わからないと言われた。けれど助けてくれた。小学校入学直前には、甲状腺が肥大して、アデノイドが口の中にできて手術をした。手術を始めたら血が止まらな

い。知恵を絞り氷の槽の中に息子を入れて手術をしてくれた。助けてくれた。こうして、39 歳 80kg の体重になって安心していたのに、突然襲われた。これが放射線の影響の事実だ。

2 番目に放射線を焼き付けられた街は長崎。長崎の原爆はプルトニウム。広島の原爆はウラニウム。プルトニウムの原爆はウラニウムの原爆よりも強い。同じようにトルーマンの命令により長崎に落とされた。3 番目に焼き付けられた街は福島の街々である。この福島の街々には広島原爆の 100 発分から 160 発分の放射性物質が巻き上げられている。そして四方八方に広がってしまっている。何時間、何日にもわたって、今なお出し続けている。この問題を一人ひとりどう考えるのか。特に日本人としてどう考えるのか問われている。アイゼンハワー大統領が、核兵器を作ったらだめだという運動が広がっていく中で、核兵器ではなく、核の平和利用をするということで、国連で大喝采を受けた。平和利用として原発を作っていった。日本も口車に乗せられ地震大国であるにもかかわらず 54 基を作ってしまった。大変愚かなこと。広島長崎を学ばなかったため、ばかげたことをしてしまった。政府も国民も学習しなかった。アイゼンハワー大統領就任時は 1,000 発の核弾頭、8 年間の間に 26,000 発に増えていた。人類を滅亡させるに足る数。これが歴史の事実。これを偽善といわないで何を偽善というのだろう。許すことのできない行為。そして原発の事故。日本人は全て放射線を浴びている。濃いか薄いかだけ。食事を通じどんどん蓄積されている。知らないで無知で、原発を推進しようとしている人たちがどんなに考えているかわからない。なぜ推進していくのか、学習すればわかるはず。推進していく人の中には学習して、知っている人もいるのかもしれない。今日は本当のことを全て言いたいと思う。

この地図は、原爆が落ちたときの広島の地図。広島の中心に平和公園。平和公園の北端に相生橋がある。Ｔの字の形をしている。相生橋の近くに産業奨励館がある。5 階建ての建物。モダンな建物だった。中にらせん階段がある。絨毯が敷いてありとてもきれいな階段だった。3 階の美術展覧会に行ったことがある。今は鉄骨だけになり、静かに建っている。緑色の屋根は銅板でできていた。屋根の部分は瞬く間に溶けてもえつきてしまった。何トンという圧力で押しつぶされた。これが今皆さんが見ている原爆ドーム。近くに島外科病院という建物があった。粉々に砕け散った。8 月 6 日、Ｂ29 は 1 万ｍ上空からやってきた。Ｂ29 は、早い時間にやってきて、大阪湾に向けて飛行、相生橋に 8 時 15 分につくよう引き返した。8 時 15 分というのは広島市民が外で働き始める時間。その時間を狙ってやってきた。1 万 m というのは、高射砲が届かない。戦闘機も戦えない。悠々とやってきた。Ｂ29 の胴体にはエノラゲイと書いていた。機長ティベッツの母親の名前がエノラゲイであった。母親は命を生み出す人、その母の名を何十万人と殺す命令を受けて書かせた。何を思ったのか理解できない。Ｂ29 は広島上空でプロペラを止めて急降下した。8,500m まで降下すると相生橋が目視できる。「相生橋に原爆を投下せよ」という命令でやってきたのだ。広島に落とされた原爆は、平和資料館に模型があるが、長さは 3m、 直径は 70 ㎝。小さな一発の核兵器。重さは 4 トン。相生橋から 200m それて島外科病院の真上に落ちてきた。43 秒後、567m 上空まで落ちてきて炸裂した。43 秒という時間は、エノラゲイと通信機材及び写真撮影の 2 機のＢ29 と共に全速力で遁走し安全な所まで逃げる事ができる時間だ。その時、100 万分の 1 秒で放射線を焼き付けた。その放射線の中心成分はコンクリートも透過してしまう。100 万分の 1 秒で生きることはできない。3 秒間にわたり光球が発生した。直径が 20m。中心の温度は 250 万度。表面温度は 30 万度。ＮＨＫの放送の中で発表された科学的な見解だ。太陽よりも大きなエネルギー。放射線が変化したもの。一つは熱の塊。二つめは衝撃波、圧力

に変化する。この 3 秒間で広島の街はめちゃくちゃにされた。3 秒間で街が壊されるというのは考えられない。でもそれが原爆の恐ろしさ。その後自然発火することになった。人間の服、皮膚、肉、骨、瞬く間に燃えていった。飛び散ると共に燃え尽くされていった。何も残されない状況。その後 7 秒間にわたり火の玉に変化していく。直径 310m。火球の表面温度 10 秒後でも 6,000 度。鉄の溶解する温度よりも高い温度。

被災した人たちは外へと逃げてきた。私はその後命令を受けて、救援活動に参加することとなった。炎の中をかいくぐって行った。救援活動のことはあまり覚えていない。その後学校へ帰ってきたとき広島の街を見ると、燃えていた。夏の暑いときだったがガタガタ震えてその炎を見た。7 日も燃えていた。8 日も燃えていた。広島の街は隅から隅まで燃え尽くされてしまった。逃げていく人たちの上を炎が通り過ぎ、燃やし尽くされていった。

この写真は 10 月 2 日のありのままの広島の街だ。破壊尽くされ燃やし尽くされていく様子がこの写真からわかってもらえると思う。殺し尽くされ、黒焦げになった遺体がそこら中に転がっていた。これが核兵器。相生橋の近くが広島一の繁華街、その場所に密集して住んでいた。そこへ原爆を投下した。誰が何と言おうと許すことはできない。これを許したら人類は絶滅してしまう。私だけでなく、科学者が異口同音に言っている。9 年後に広島原爆の 1,000 倍の水爆を作っている。その水爆をビキニ環礁で実験している。私が見たキノコ雲は、広島の街の上にできたキノコ雲で高さは 12,000m。その後黒い雨が降ってきた。何時間も。その後、灰塵・粉塵が降ってきた。水爆は直径 100ｋｍ、広島駅から福山駅までが 100ｋｍ。広島県の東から西を覆うキノコ雲になる。今、彼等は広島原爆の数千倍という威力の核兵器を持っている。そう考えれば、今恐ろしい世界に住んでいると言っても過言ではない。しかしそのようなことに無知のままでいいのだろうか。今日この会に呼んでいただいて感謝している。私が考えていることを伝えさせていただけるから。ひとりでも多くの人に事実を伝えておかないといけないと思っている。

私は、広島師範学校に行っていた。音楽の好きな少年だった。父親の影響で音楽が好きだった。蓄音機で世界中の音楽を聴いていた。7 人兄弟の末っ子だった。1929 年、世界大恐慌がやってきた。父親の仕事は倒産した。財産を売り払って無一文になった。炭を焼いて借金を返すようになった。父親を手伝っていた。小学校 6 年生の後、お金のかかる学校には行けなかった。広島師範学校だけはお金がかからない。ピアノのレッスンも受けられる。兵役も免れる。決意して受験し合格した。師範学校で 1 年間教育を受けた。その後授業がなくなり始めた。真っ先になくなったのは音楽と美術。英語は 5 時間あったが瞬く間にゼロとなった。英語の先生が言った。「敵国の言葉等を学習する必要は全くなし。」その後 3 年間英語の授業は受けたことがなかった。私は英語で話すことができない。話せないことは悔しい。1985 年、被爆 40 周年にモスクワで平和の学生祭典があった。二人の被爆した先生が呼ばれた。レーニンスタジアムの写真をご覧下さい。1 時間あげるから被爆体験を話してくれと言われた。20 分しか話せない。日本語しか話せないから、英語、ロシア語と 2 回翻訳するので、翻訳するのに時間がかかる。ドイツでは日本語から直接ドイツ語に翻訳してくれたので 30 分話せた。1944 年 4 月から授業がなくなった。このことを今の学生さんに聞いても答えられない。戦争体験のない先生方だから仕方ないかもしれないが。現職で話をしてくれる先生がいなくなった。学徒動員されてしまった。1 週間は月月火水木金金の歌を歌って、戦争に勝つまでは 1 時間の授業も欲しがらないで頑張ることをたたき込まれた。これが戦争。

その当時の服装、1年中同じ。夏に暑いからといってその辺に脱いで置くと、ビンタされていた。天皇が下賜したものを粗末に扱うということで。木造の船でものを運ぶ仕事をしていた。ドラム缶を運ぶ仕事が一番いやだった。地面の上を転がして運ぶのだが石がへばりついていた。その石のついたドラム缶を転がすので手は血だらけになった。誰かが手を離すと潰されて死んでしまう。手がガタガタになっていた。戦争が終わり、その手をいといながらピアノを弾いた。

今の宇品港でなく、軍港宇品港に1894（M27）年、線路が延びてきた。日清戦争。その線路は戦争と関わりがあった。軍の兵隊を運ぶために線路を作った。そして、軍港宇品港から大陸へと出ていた。50年にわたる侵略戦争となっていく。そして第2次世界大戦になるが、広島の街には爆弾1発も落とさなかった。広島の島々の軍事基地には落としていた。編隊ではやって来ない。原爆が落とされてその意味がわかった。

当日の朝も師範学校近くの猿候川に止めていた船を自分たちで運転して、金輪島にやってきて、学生の控室でお茶を飲んでしゃべっていた時だった。爆心地から直線で6ｋｍ離れている。原爆が落ちたその時の圧力や熱が、顔の左から来たことの記憶はある。しかしその後の記憶がない。無意識のうちに鉄兜をかぶって机の下にしゃがんでいた。物音が全部なくなった。音が何もなく静まりかえっている。何事か大事件が起きたことはわかった。音がしていた島だから全くないのは怖く感じた。友達と一緒に外に出ようとする。友達の頭から血が流れている。自分も血を流していることを、友達に言われて知る。ガラスの破片が刺さっていた。広場に集まりキノコ雲、原子雲を見たのであるが、みんな度肝を抜かれた状態となり、ぼんやりその雲を見ることしかできなかった。広場のはしを白いブラウスとモンペをはいた女学生が、ガラスの破片を胸にたくさん受けている様子を見て何も言えなかった。その女学生達はミシンで軍隊の服を縫っていた。

会場の様子

17歳の私は、兵役が始まる大事な存在。師範学校の兵役免除もとっくの昔になくなっている。遺書を書いて学校に出して学徒動員に出ていた。すぐに学校に帰った。全員が寮生活。学校の建物は壊されていた。学校の運動場はサツマイモが植わっていた。その場で待っていたが先生はいつまで経ってもやって来なかった。先生達も大変な目に遭っていた。じっと待つしかなかった。3人のグループで舟入町の先生の救援活動に行けと命令をされた。学校から先生の家に行く途中で、街の中から逃げてきた人たちと出会った。どの人も真っ黒けだった。ものを言わないで黙っている。戦争中男子は丸坊主。長い髪の人は女性。その長い髪の人が汚い髪になっている。3人とも言った。「これは大変だぞ。」街の中で何が起こっているのか知らない。知らないからのんき。話しながら先を行った。歩いている人がだんだんいなくなった。そしてしゃべらなくなった。しゃべらなくなったというより、しゃべれなくなった。うごめいた人ばかりだった。逃げていく人たちがうごめいていた。被爆後うごめいていた人たちを思い出したくなかった。原爆など思い出したくもないと思っていた。一言もしゃべらない人間になった。1970年代後半から原水爆禁止世界大会に参加するようになって気持ちが変わってきた。1988（Ｓ63）年退職。その直前から話せるようになった。今は話さないといけないと思っている。体

が続く限り話しておかないといけない。最後は鬼になってでも話しておかないといけない。

うごめいた人の話をしておく。人はうごめかないと前に進むことはできない。体を揺すらないと。長い髪の女の人。髪は熱線を浴びてちじれている。汚い髪がたれている。服は焼ききられている。頭はただれている。体中から血が流れている。血は赤くない。真っ黒になっている。灰塵がへばりついている。背中はビフテキのように焼かれている。あの時に会った女性の姿が私の目には焼き付いている。目をつむると鮮明に思い出される。

丸坊主の男性がやってくる。体の前から爆風が来たのがわかるくらい、瓦礫が付き真っ黒い血が流れている。真っ赤なのは目の部分だけ、でも見えてないと思われるような様子。遅れないように必死について行こうとする男性の姿も忘れられない。燃える体を癒やそうと川に飛び込んだ人を見た。その後上がっていこうとする力はもうない。逆さまになったまま力尽きている。向こう岸でそういう姿を次々と見た。私を含めた 3 人ともだんだんおかしくなった。小学生がよく言う。「そんなんだったら学校に帰ればよかったのに。」師範学校の学生はそんなことはできなかった。自分の命を落としてでもその命令は従わないといけなかった。電柱は倒れて燃えていた。水道管が破裂していた。私たちはその水を浴びながら、広場では倒れて真っ黒になった人たちの手が伸びてくるのを、水をくれといっているのを聞いて、その手を払いのけて前に進んだ。3 人とも狂ってしまっている。正常ではない。平気で払いのけた。黒焦げの死体が次々と目に入ってきた。堅い炭に焼かれている。ハンマーでたたいても壊れないと思われるような様子。この写真は、まだ人の亡骸の形をしている。私たちが目にしたものは人の形をしていないものばかりだった。異様な黒焦げの塊。無数に目にした。生きたまま焼かれたことがわかる。口を開けたままになっている。どのような救援活動をしたのかは覚えていない。帰ってくる道の様子も覚えていない。

お百姓さんのブドウ畑で横になった。ブドウの房がぶら下がっていた。熟している粒があった。それをとって食べた。3 人とも次々とって食べた。先生になろうとする学生が平然とブドウをとって食べていた。学生達は次々に入って、食べてしまった。戦争が終わって師範学校は、お百姓さんにブドウ代を弁償した。

学校の近くに横たわっている死体を焼けという命令が出た。担架を持って行って乗せようとする。手はヌルッと抜けてしまう。骨だけになってしまう。足も同じ様子。胴体に縄を巻いて、ズルズル引っ張って運んだ。毎日死体を焼くにおいが立ち込めていた。割り箸と缶詰のカンカンの大きいのをもらって救護活動に行けという命令が出た。講堂に入ると熱い空気と血のにおいが私たちを襲ってきた。人間の我慢を超えたようなにおい。我慢してはいると講堂の中はウオンウオン鳴っている。被爆者のうめき声。その皮膚にウジ虫がわいて食いちぎっている。中に入っている。肉を食いちぎるので痛い。その痛みにうめいている。食らいついているウジ虫をひっぱってとる。全部とったと思って、中を見ると大きなウジ虫が中から出てくる。包帯を巻いてもらっているが用をなしていない。その周りからウジ虫がぽろりぽろり落ちている。包帯に手をかけめくった。中に無数のウジ虫が動いていた。この姿も忘れることができない。そのウジ虫を捕る仕事をした。

そして街の中の伝令の仕事もした。八丁堀の電車の中に真っ黒焦げの亡骸がぶら下がっていた。私の友達が電車の枠をどんと蹴ると、真っ黒い死体がどろどろと落ちていった。それでもぶら下がっていた。今度は私が近寄ってどんと蹴るとまたどろどろと落ちる。それでもまだぶら下がっている。それを見て平然と伝令の仕事をした。みんな狂った状態になっている。そんなことを平気でやれる人間

になっている。そして8月15日がやってくる。

私は火傷した後輩を福山駅まで4人で担架を使って運ぶ命令を受けた。その途中の広島駅のホームで玉音放送を聞いた。その時は頭の中は空っぽで何にも感じなかった。抜け殻みたいな人間だった。その時戦争は終わったとは思った。そして福山の後輩の家まで送った。ありがとうと感謝された。後輩のお母さんは白米だけのご飯を炊いておにぎりを作ってくれた。うれしかった。お米食べたことなかった。食べ物がない時代。なめるように食べた。泊めてもらった。しかし栄養のあるものを受け付けなくなっていた体には、おにぎりがあわず3人とも、下痢になってしまった。這うようにして田舎に帰った。

1週間後、枕元には髪が抜けていた。私がよみがえれたのは音楽の力。 2週間目の中ごろ、父親がラジオのスイッチをひねって聞かせてくれた。クラシックが聞こえてきた。モーツアルトの『フィガロの結婚の序曲』だった。それを聴いて力がよみがえってきた。音楽の先生になろう、音楽を一生懸命勉強しようと思えるようになった。

おもゆ、おかゆと少しずつ食べられるようになって、9月になってようやく立てるようになった。「学校に帰ってこい。」と通知がきた。学校を復興しないといけない。そして広島まで戻り、猿候川の畔まで歩いてきたときに、歩けなくなった。川の水面一面に死体が浮いている。どの死体も裸。はち切れんばかりにふくれている。そして学校に帰った直後、9月17日、枕崎台風が広島の街を襲った。この台風の結果、川に浮いていた亡骸は埋まってしまった。川底に埋まってしまった。私たちの目に届かなくなった。それから71年が経過した。この間、川底から亡骸を取り出して弔ったという話は一度も聞いたことがない。そのままほったらかしのまま今日を迎えている事実。広島の街の川底にはたくさんの被爆者が静かに眠ったままになっている。

この事実を証明するものが出てくる。相生橋近くの川底から陶器の中学生のボタンが出てきた。さらに、軍港宇品港から似島の陸軍検疫所へ被爆者が1万人以上送られたのだ。それが8月25日宇品港に帰ったのは500人だった。1971（S46）年、似島の中学校の運動場となった土の下から617体の遺体が堀り出された。平成になってすぐ馬の検疫所の焼却炉の下から、スコップ300杯分の被爆者の亡骸が出てきた。今も掘り出され続けている。平和公園の地下に骸が今も眠っている。広島は屍の街だ。

核兵器は地球上に1発たりとも置いてはならない。これがヒロシマの心。オバマさんが広島に来た。謝罪するかどうかが問題になった。謝罪はしなかった。謝罪するのは当たり前、当然のこと、人道に外れている。謝罪して当たり前。謝罪させて終わりではない。私たち日本人も謝罪する必要がある。周辺を侵略した事実がある。無知なまま、侵略の手助けをしていた自分がいる。限られた時間だから、うまく言えなかったもしれないが、「ヒロシマの心」を伝えに来ました。

参加者感想

- 体験に基づく話には、心打つものがある。1945年8月6日以降のヒロシマの、まだまだ見知らぬ街の一面を機かせていただき本当に感謝致します。ありがとうございます。
- 遠いところ、よくお越しくださいました。穏やかな口調の中に、赤裸々な内容を話してくださいました。台本もなく、お話される姿を見て、江種さんがこれまで何度も話されていたことが伺えます。『一人ひとりから始まる』今日、一番心に残った言葉です。
- 元音楽の先生らしい良い声の上に、巧みな話術の持ち主であることが、この講演をすばらしいものにし

ていたと思いますが、何よりも話しの中身が圧倒的な力を持って、私たちに迫ってきてくれたと思います。被爆者としての苦しい体験であったことは、退職後まで話せなかったことからも伝わってきましたが、ヒロシマのことが、今 70 年を過ぎてなお、伝わっていない、踏みにじられてきたことが、フクシマでも繰り返されたのだということが、わかりました。私たちにできることを今一度、見つめ直させてくれる良い講演だったと思います。

- 痛ましい体験をされながら、今も精力的に講演をされている江種さんに、心から敬意を表したいと思います。江種さんの講演が、とてもすばらしかったと思います。
- 戦争の美談ではなく、戦争の醜さ、リアルな事象で良かったと思う。「別の人が話しただけでは、臭いや音が伝わらない。」と言っていたのを思い出した。
- 私が小さい時も、実際に被爆された方の話を聴く機会がありましたが、あの時と今では感じ方が変わったなと自身を振り返ってそう思いました。幼かったからこそ感じることや、大人になったからこそわかること。とても多くのことを考えさせられました。また、江種さんの講演を聴いて、心に残ったことは、「米国側が謝罪するだけではなく、日本国も他国に謝罪する。互いが謝罪する。ヒロシマの心を大切に。」という内容です。
- 知らないことが多すぎた。小学校・中学校でも教え伝えるべきだ。

閉会あいさつ　**田中　正史さん:愛媛教職員組合　委員長**

ボブ・ディランが 21 歳の時に歌った歌のコメントに、世の中で一番の悪いのは、間違っていることが分っているのに目を背けることです。日本の大人はどうでしょうか。福島の原発事故では経済最優先のために切り捨てられ、取り残され、さらに時間が経つと自己責任に転嫁されつつあります。広島、長崎の原爆被爆の経験があるにも関わらず。報道しないと人々は忘れます。今日聴いたこと、感じたことを家族、職場の方に伝えていきましょう。未来の子どもたちのために。

◆◇編集後記◇◆

「ヒロシマの心」がよくわかる、体験者だけが語れる、衝撃的な講演でした。

「また参加したい。ここでしか学べない。」という研究会に、今後も取組んでいきたいと思います。

子どもたちと教職員の生活を守るため、共に考えましょう!

私たち愛媛教職員組合は、年に数回、研修会（研究会）を開催し現場での力量を高めています。ぜひ、ご参加いただき共に学びましょう。

質問や感想がございましたら、ご気軽にご連絡ください。

〒790-0813　松山市萱町6丁目42　コーポラスかやまち1F

TEL(089)924－4546　／　FAX(089)924－4403　／　e-mail jtuehime@lime.ocn.ne.jp

HP http://jtuehime.sakura.ne.jp/

愛媛教職員組合　書記長　堤　剛